

《解答と解説》

出典：三井高房『町人考見録』〈序文〉の冒頭の一節 / 青山学院大学 経済学部・97年

現代語訳……そもそも天下の四民は、士農工商と分かれ、めいめいが自分の職分をつとめ、子孫が家業を継いでその家をきちんと治める。中でも町人は商売がそれぞれわかるとはいっても、まずは金銀の儲けに頼る以外にない。ところが田舎の町人は、それぞれの藩主に遠慮して、その上の者がそれほど華美にしないために、自然と気移りすることがない。こういうことで多くの代を重ねて家業につとめる。京都・江戸・大坂の町人は、その初代は、ある者は田舎から上り、またある者は他人の店の使用人から次第に成り上がり、商売（の規模や種類）を広げ、財産を子孫に残そうと、その一生を儉約につとめ、家業の外に気を散らさず、艱難辛苦を積んで、その子が家を継ぎ、その当人は親の質素な生活を見慣れ、またその家がそれほど豊かにならないうちに（親から）見習って育つために、何とかその一代だけは守り通すけれども、また創業者の孫の代になると、すでに家が豊かである時から育ち、物事の辛さや金銀の大切さということを知らない。そのために自然と世間の風潮を見習い、心がおこって、家業を他人まかせにしたままで、うかうかと月日を送り、身代の大きさに応じて出費も多くなっていくうちに、当人もだんだんと年をとり、商売のことがわかってきたとしても、家業のことを知らず、出費が多くなるのにまかせて、目先のやりくりのために他人から金を借り、次第に利息が増して困り、しまいには家をつぶす者（があるというのが、）世のならわしとなる。およそ京都の名のある町人で、二代三代で家をつぶし、あとかたもなくなってゆくことは、まああたりに見ることである。故事に言う、「物事の創始をみ」ことにする者はあっても、終わりを立派にする者は少ない」と。また、「安全な所においても危急の場合を忘れてはならない」とは、一代のうちに家業を興し、富を得る者に関する言葉である。まして親が蓄えた遺産を譲り受けて、生まれついで富を持つ者で「終わりを立派にする者」などいるであろうか。

《解答》

問1 (ウ)

問2 (イ)

問3 ふ

問4 (ア)

問5 (イ)

問6 (ウ)

問7 (ア)

問8 君子安而不_レ忘_レ危 存而不_レ忘_レ亡 治而不_レ忘_レ乱

問9 (オ)

《解説》

問1 傍線部の解釈問題。このような問題ではまず傍線部の品詞分解をし、ポイントになっている単語や文法事項などをチェックする。次に前後の文脈の中に傍線部を置いてみて、どういう働きをしているのかを大きな視点で捉える。これら両方の視点で総合的に判断して傍線部の解釈を決定づけるのである。また、選択式の問題の場合は、これに加えて選択肢の分析能力も問われている。

傍線部(1)を品詞分解してみよう。「利足／＼にかかる／＼より／外／なし」。とりたてて難解な単語はないが、動詞「かかる」が平仮名である点に注意しよう。古文に多い指示語「斯かる」(「かくあり」)が変化してできた語。ラ変動詞の連体形とみる考え方と連体詞とする考え方がある)なのか、「懸かる・掛かる」(ラ行四段活用)なのか識別させるわけである。文脈を考えると傍線部の直前「金銀の」から続けて「利足」とあるから「／＼にかかる(コト)より外なし」と体言を補えば、「斯かる」では意味不通となり、「懸かる・掛かる」(語義「よりかかる、頼る」)の方が正しいことがわかる。「金銀の利足(息)によりかかること以外には(商売の道は)ない」とくれば、文脈にもかなう解釈となる。ここで選択肢の分析に入る。まず、「かかる」の解釈を「斯かる」としている(イ)を消去しよう。次いで「かかる」を「懸かる・掛かる」としているものを探すと(ア)と(ウ)が残り、(エ)・(オ)は除外される。最後に「／＼より外なし」の正しい解釈は「／＼以外にない」であるから正解は(ウ)となる。

なお、一言付け加えるならば、入試問題では辞書的な訳や表現がそのまま用いられているものは危険である場合が少なくない。この場合も「懸かる・掛かる」の辞書的な意味は「頼る」であるが、正解は(ウ)である。言葉のもつ内容を、文脈に合わせて幾通りか表現し換える学習習慣を心がけることが重要である。

問2

傍線部の解釈問題。この問題の解法は問1と同様である。傍線部(2)を品詞分解してみよう。「心／＼／おのづから／うつる／事／なし」。この場合も、難解な語があるわけではないが、動詞「うつる」の解釈がポイントとなる。平仮名である点、やはり注意が必要である。「うつる」は、「映る・写る」などもあるが、「移る」もある。ここでは文脈上「心に」を受けるかたちで「うつる」がある。したがってもっと大きな視点で捉えないとどちらともとれてしまう。傍線部(2)の前の行「然るに田舎の町人は」からの文脈で「その上目にさのみ美麗を見ざる故に」(＝その上の者がそれほど華美にしないために)を受けて傍線部(2)はあるのである。「華美にしないために」「心に」「うつる事なし」ならば、「変わらない、初心を忘れない」などといった意味が浮かんでくるのではないだろうか。「うつる」は「移る」なのである。「おのづから」は副詞。「自然に、ひとりでに」の意のほか、「偶然に、たまたま」の意もある。また、下に仮定表現を伴った場合は「もしも、万一」の意となる。ここではさきほど述べた大きな視点、文脈から考えると「華美にしないために」「自然と」「心が移ることがない(＝初心を忘れない)」の形が整う。したがって「自然に、ひとりでに」の意であることがわかる。選択肢を観察すると、「うつる」の解釈の明らかな誤りの(ア)・(オ)は消去できる。次いで「おのづから」の正しい解釈は「自然と」なので正解は(イ)となることがわかる。

副詞について一言付け加えておこう。副詞とは、自立語で活用がなく、主語になれず、単独で連用修飾語となれる語のことであり、状態副詞・程度副詞・陳述副詞に分けられる。また、副詞の中には他の副詞やある種の体言を修飾するもの(「もっとゆっくり」「やや右」など)や、「の」を伴って連体修飾語となるもの(「しばらくの間」「さっそくの御返事」など)がある。これらは現代語の副詞の考え方や用例だが、古語でも考え方は全く同じだと思つてよいだろう。状態の副詞「うらうらに」「つれづれと」、程度の副詞「いと」「やや」、陳述の副詞「いまだ」「たとひ」、などが古語の例であり、副詞を修飾する例として「いとどなよなよと」など、体言を修飾する例として「ただ一人」などがある。副詞の意味・用法は時代による変遷が大きく、用例を参考にして厳密に分析するよう心がけたいものである。

問3

動詞の読みと基本形に戻す問題。傍線部Xは「経上あがり」と読むが、「経」とは下二段活用の連用形である。したがって終止形は「経」。一音節ということもあつて現代語の語感からは離れているので要注意である。動詞の基本形は、ラ変を除いてすべてウ段であるという大原則がある。これに基づいて解答を確認しよう。

なお、参考までに「経上あがる」についてであるが、語の意味は「昇進する・成り上がる」など。類語に「成り上がる」「成りのぼる」がある。

問4

傍線部の解釈問題。問1で述べた解法によって解く。傍線部(3)を品詞分解すると、「その／家／の／さ／まで／富ま／ざる／うち／に」となる。指示語「その／家」と「さ／まで」がポイントであることがわかる。「その／家」は、文脈から「京・江戸・大坂の町人」の繁栄の例を述べたもので、親の代に大きく成功する場合の「その家」であることがわかる。また、「さ／まで」は語句としては多用されるので熟語として理解したい。「然^ままで」は、副詞「然^ま」＋副助詞「まで」という構成で、「それほどまで」といった意味、あるいは打消の語を伴って「それほどは、たいして」の意味である。傍線部(3)では「富まざる」(打消)にかかるので後者の意味として理解すればよい。そうすれば「それほど／ない」の構文を持ったものが正解であることがわかる。また「その家の」の「の」は主語を示していると考えられるため、「が」と訳される。以上から選択肢を分析・検討すると、「の」を「が」と訳しているものは(ア)・(ウ)のみで、「さまで」を先述の通り解しているものは(ア)だけであることから、(ア)が正解となる。

なお、一言付け加えておくと、副詞の下に助詞がついたものはその多くが副詞と一体となって機能するため、副詞＋助詞≡副詞と考えても差し支えない。つまり、「さまで」を一語で副詞と考えることもできるわけである。

問5

基本的には傍線部の解釈問題と考えられる。ただ口語訳というよりも内容本位の設問ということである。このような問題の場合も品詞分解と文脈の中への位置づけという解法は変わらないが、表現の細部にはこだわらないほうがよいと思われるので、意味の単位ごとに文節で切っけて解いてみよう。すると、傍線部(4)は「身体に／物入り／多く／成り行く」となる。「身体」は脚注に「身に同じ」とある。「身に」とは、一身に属するいつさいの財産・資産のことである。「物入り」とは、費用のかかること、出費のことである。ここで、大きな視点で文脈をながめよう。これは2行前の「孫の代に至りては」を受けた内容である。「金銀を大切といふ事をしらず」「心たかぶり」「うかうかと月日を暮らし」という流れを受けているので、「物入り多く成り行く」とは「出費が多くなっていく」ということにまちがいないことがわかる。また、傍線部(4)の2行前の「はや家の富貴より育ち」とあるところから、孫の代では、身代の大きさが生まれながらの自然な大きさとしてしか感じられないので、節約するということが不可能なのだといっていると思われる。選択肢を検討・分析してみよう。「物入り」を「出費」と捉えていない(ウ)が消去できる。次に「身代の大きさに応じて」とある(イ)は身代の大きさをそのままに出費がかさみ節約できないという内容であるから最もふさわしく正解となる。(ア)の「守ろうと」はこの時点でそんな意志はないので不可。(エ)の「身代がそれほど大きくないのに」は身代以上の出費という意味であり、これも不可。(オ)の「身代が大きいだけに」は一見よさそうに見えるが、「出費も多くならざるをえない」が不自然である。孫の感覚では身代の大きさそのままに自然と出費が決まってゆくのであり、生まれついでの彼の感覚は、他者からどうすることもできない、ということが筆者の文章の真意なのである。

問6

傍線部の解釈問題。問1で示した通り、品詞分解と文脈の中での位置づけによって解いてみよう。傍線部(5)を品詞分解すると「手廻し／＼に／人／の／金銀／を／請け込み」となる。「手廻し」とは近世語で、「手許の金銭のくりまわし、やりくり」のことである。「人／の／金銀」は、「他人の金銭」の事である。「請け込(む)」は、近世語で「引き受ける」の意である。語句の意味を総合すると「手許の金銭のやりくりのために、他人の金銭を引き受ける」こととなり、つまりその場しのぎの借金をすることにほかならない。傍線部(5)の直前の「物入りの多くなるにまかせ(＝消費が多くなるのにまかせて)」という文脈を待つまでもなく正解は見えてくる問題である。「請け込み(＝借金をする)」の意以外の(エ)・(オ)は消去。「手廻し」の意「目先のやりくり」となっているものは(ウ)しかないのでこれが正解となる。もし、単語そのものの意味を知らない場合でも、(ア)の「計算ずく」や(イ)の「金に詰まって」では、「手廻し」の語感と大きくずれている。

問7

傍線部の解釈問題。問1で述べた通り、品詞分解と文脈による位置づけをおこなって解く。傍線部(6)を品詞分解すると「利／まどひ／に／なり」となる。「利」は選択肢すべて一致している通り「利息」のことである。「まどひ」は「惑ひまどひ」であるところかもう。いうまでもなく、動詞「惑ふ」は、「混乱する」のが原義であるが、ここでは「あわてる、うろたえる、困る」といった動作がふさわしい。利息の支払いに追われるようになるという文脈から判断できるのである。選択肢で文脈上合っていない(ウ)・(オ)がまず除かれる。困窮する状況の表現としてピントがずれている(イ)も除外できる。(エ)は「まどひ」の語感に合わず、残る(ア)が正解となる。

問8

漢文の白文に返り点を施す問題。いわば古・漢融合問題であるが、実はさほどの難問ではない。傍線部(7)「易きに居て危ふきをわする事なかれ」の典拠となった『易経』そのものを読むというより、まず、傍線部(7)の分析から入ることである。ここでは「易き」と「危ふき」が反対語であることに注目しよう。そうすれば、漢文の白文の方にも同様の語(反対語の組み合わせ)が見つかるであろう。そうすれば、傍線部(7)をうまく利用して返り点を施すことができる。まず最初の句「君子安而不忘危」の「君子」は「立派な人格・教養をそなえた人」の意であり、主語となっている。次に傍線部(7)の「易き」と「危ふき」のような反対語の組み合わせ、「安」と「危」に注目する。そして「安」を「安けれども」と読み、句末の「危」(＝「危あやふき」と対応させる。「而」は接続の助字であり、読まなくともよい。「不忘」を「忘れず」と読むと、句全体の意味がつかってくる。これを傍線部(7)の「易きに居て危ふきをわする事なかれ」を下敷きにしてよむと、「君子は、安けれども危あやふきを忘れず」と読めるのである。これに従って返り点を施せば「君子安而不忘危」となる。二句目・三句目とも同様の構造になっていることに気付いてもらいたい。すると、それぞれ二句目は「存」と「亡」が反対語で、三句目は「治」と

「乱」が反対語となっていること以外、全く同じ構造なので、それぞれ「存而不_レ忘_レ亡_レ」（存すれども亡_レを忘れず）、「治而不_レ忘_レ乱_レ」（治れども乱_レを忘れず）となることがわかるであろう。

ちなみに、この句の出典となっている『易経』（繫辭伝）は、易全体を解説したもので孔子の作といわれる。ここでは、いかにして国家を守り経営していくかについての心得が説かれており、それが『町人考見録』の筆者三井高房によって、いかにして家を守り経営していくかに置きかえられているのである。

問9

空所補充の問題。空所補充の問題の多くは、呼応関係をもつ語句のどちらか一方を空欄にする形である。たとえば、係り結び、陳述（呼応）の副詞の構文、などである。その点を念頭に置いて解く。この場合は文末の空欄なので、もう一方の副詞（又は係助詞）をさがして文頭の方を観察してみよう。すると、文の書き出しは「ましていはんや」となっている。「まして」は副詞だが、下に呼応する決まった表現が来るわけではない。「いはんや」は、陳述（呼応）の副詞といって下に「くをや」という表現の形式を持つ。その点をチェックすれば選択肢中(オ)が正解であるとわかる。

《解答と解説》

出典：甲Ⅱ吉田兼好『徒然草』〈第三八段〉より・乙Ⅱ『論語』〈十卷本第九卷 陽貨第十七〉より / 早稲田大学 政治経済学部・98年

現代語訳……御随身の近友の自慢として、書き残している故実がある。(とはいえ読んでみると) 全て馬術(のことばかりで)、別にどうということもないことばかりである。(というわけで、まあ) その前例のことを考えて、(私にも) 自慢のことが(いくつか) ある。

現在の(後醍醐)帝がまだ皇太子でおいであそばしたころ、万里小路殿までのこうじどの(という御殿)が東宮御所であったのだが、(その御所内の)堀川大納言さまが出仕していらっしやった執務室に、用事があって(私が)参上したところ、(大納言さまは)『論語』の第四・五・六の巻をあれこれと広げておいでになって、「たった今、東宮さまにおかせられては、『(中間色である)紫が(正色である)赤を圧倒する(ような印象を与える)ことが気にいらぬ』という文言(の原典)を御覧になる御希望があって、御本をお読みになるのだが、見つけることがおできにならないのだ。(そこで私に)『もっと念入りに探してみてください』との仰せがあったので、(こうして)探しているのだ(が、私も見つけられずに困っているところなのだよ)」とおっしゃるので、(私が)「その文句なら)第九巻のどこそこあたりにございますが」と申し上げたところ、「いやあ、助かった」とおっしゃって、(東宮さまのところ)にその巻を(持っていて)お渡し申し上げなされたのであった。

この程度の(人が度忘れたのをたまた私が覚えていたような)ことは、子供たちも(よくやるような)ありふれたことではあるが、昔の人は、ちょっとしたことについても、ひどく自慢しているものである。後鳥羽院が御製ぎよせい(をお詠みになるときに)「袖と袂と(いう似たような二つの言葉を)、一首の中に(詠み込んでは)いけないものだろうか」と、(新古今集撰者のひとり)で当時の歌道の権威であった)定家卿にお尋ねあそばした(ときに)、(定家卿が)すぐさま「(古歌にも)『秋の野の……穂に花の出た薄は、秋の野の草の《袂》なのだろうか。(だから)穂に花が出て(いる様子)が)恋しさをあらわにして(人を)招く《袖》のように見えるのである」と(古今集の在原棟梁の先例が)「ございますから、何の支障がございませうや(、)いっこう構いませんまい)」と申し上げたことも、(定家卿御自身が)「(御下問があったときに)状況に応じて典拠となる歌をよく承知していた。(和歌の)道での神の御加護でもあり、素晴らしい好運でもある」などと、大げさに書き残しておられるので「ございますそうな。九条相国伊通公の昇進申請の願書にも、

たいしたことのない項目まで書き載せて、(御自分の功績を) 自賛なさつてある。

人が大勢同行して、(比叡山の東塔・西塔・横川の三箇所をめぐる) 三塔巡礼ということ(をしたこと) がございましたが、(そのときに) 横川の常行堂の中に、竜華院りゅうげいんと書いてある古い額があった。「ともに三蹟に数えられる) 佐理・行成の(二人の) うち(どちらの筆かについて) 疑問があつて、まだ決着がついていないと言ひ伝えております」と、堂(に奉仕する修行) 僧がもつたいぶつて申しましたので、(私が) 「行成(の書いたもの) ならば、裏書きがあるに違ひない。佐理ならば、裏書きはないはずだ」と言つたところ、(実際に見てみると、その額の) 裏は塵が積もり、虫の巢に(なつてい) て汚らしかつたのを、きれいに掃き拭つて、皆で見ますと、行成の官位・姓名・年号がはつきり見えましたので、その場の一同は大いにおもしろがつた(ことでした)。

(釈迦入滅の日である陰曆) 二月十五日の明月の夜、夜が更けてから、千本釈迦堂(の涅槃会) に参詣し、(庶民の集まる) 後ろ(の座のほう) から入つて、ひとり顔を深く隠して(説教を) 聴聞しておりましたところ、優雅な女性で、姿や香りが他の人とは違つて素晴らしい(人) が、(人々の間を) かき分けて入つてきて(私の) 膝に寄りかかると、(その人が着物に焚き込めた香の) 香りなども(我が身に) 移るほど(にしなだれかかってくる) だったので、これは厄介だと思つて、(膝を) ずらして脇にどくと、それでもやはり(私に) にじり寄つて、(前と) 同じ様子(で私を誘惑するよう) なので、(私はその場を) 立ち去つた。その後、ある御所方に仕える古参の女房が、とりとめもない話をされた(その) ついでに、「どうしようもなく無粋な方でいらつしたものだ、(あなたに) 幻滅申し上げたことがあつたのですよ。つれないと(言つて) あなたをお恨み申し上げます」と、打ち明け話をなさつたのだが、(私は) 「まったくもつて、なんのことかさつぱり身に覚えのないことですが」と申し上げて、そのままになつてしまつた。

(このこと) (について)、後で聞きましたところでは、例の(千本の寺の) 聴聞の夜、(前の方のある高貴な方の) お席の中からその方が(私を) おみつけになつて、お付きの女房を美しく化粧させて(お席から) お出しになつて、「(もし) うまくいったら、(あそこの兼好に) 声を掛けるのだぞ。そのときの様子を、(ここへ) 帰つてから報告しなさい。おもしろかろう」と(おっしゃつ) て、(私をからかおうと) お仕組みになつたことだつたそうだ。

書き下し文……〔論語〕子曰はく、「紫の朱を奪ふを悪むなり、鄭声の雅楽を乱るを悪むなり、利口の邦家を覆へす者を悪む」。

〔注釈〕朱は五正色の一なり。紫は則ち間色なり。楽は雅を以て正と為す。鄭声は則ち慢にして煩はし。利口は能く弁じて、以て是非善悪を顛倒すべし。

現代語訳……〔論語〕先生がおっしゃるには、「(まじりけのある)紫が(純粹な)赤を圧倒する(ような印象を与える)のは気にいらぬ。鄭の(国のみだらな)音楽が(権威ある周王朝の)優雅な音楽を乱すのは我慢できない。口の達者な者で(その本末顛倒な口先のために)国家を転覆させるような者は許せない。(つまり、なにことも下品で目立つものが上品でおだやかなものを圧倒するのは困ったことだ)」と。

〔注釈〕赤は五つの純粹な色のひとつである。(これに対して)紫はとりもなおさず中間色である。(また)音楽は(周王朝の伝統である)雅楽を正統とする。(これに対して)鄭の(国)の音楽はつまり淫らでうるさい。(また)口の達者な者は口先で人をまるめこむことができ、それによって是非善悪をひっくりかえすことができる。

《解答》

問1 A〓イ

D〓ホ

問2 口

問3 申したりしかば

問4 ホ

問5 口

問6 興(22行目)

問7 ホ

問8 がくは雅をもつて正となす

問9 憎悪(または「好悪」など)

問10 ハ

問1 一般に、読解問題における空欄補充は、「前後の文脈を手がかりにして解く」「文章の構造に注意して解く」のどちらかで解けることが多い。ここでも、Aでは後者を、Dでは前者を用いて解答を導いていこう。

A ここでは第三段落にある「昔の人はいささかの事をも、いみじく自讃したるなり」に注目したい。「近友」が書き留めておいた自讃も、所詮「昔の人はいささかの事をも、いみじく自讃したるなり」とまとめられるものでしかない。とすれば、空欄には「たいしたことはない」というマイナスの評価が入るはずだということが見えてくる。この点から選択肢を眺めると、「させることなき事どもなり」とあるイが最適ということになる。

D ここでは注目したのは、空欄が定家に対する後鳥羽院の問いになっている点である。この点にさえ気が付けば、定家の答えから逆に質問の内容を推定することが可能である。ここで定家が答えているのは、「秋の野の〜」という歌を挙げて、こういう歌もあるのだから何の問題もありません、ということである。とすれば、後鳥羽院の質問は、ホ「袖と袂と、一首のうちに悪しかりなんや」と考えるのが素直である。

問2 古文を読解する上での基本的な語句の知識を問う設問。ポイントは「当代」「坊」の理解だが、どちらも基本的なものである（間違えた諸君には猛省を促しておきたい。「当代」とは「現在の天皇」、「坊」は多義語だがこの文脈では「東宮坊（春宮坊）」の略で「東宮・皇太子」（文字通りには、東宮の御座所）の意である。したがって、正解は口となる。

問3 空欄の担うべき意味が「申し上げたところ」になるだろう、というのは語群と文脈を照らし合わせれば難なく理解できるだろう。あとはこの「申し上げたところ」という意味になるように、「申す・ば・たり・き」を並べ替えればよい。それほど困ることもなからうが、語順について「たり」と「き」の順番で戸惑った諸君がいたのではなからうか。しかし、安心されたい。「たり」は連用形接続だが（右に挙げた意味から《断定》にはなりようがない）、「き」には連用形がない。ということは、「たり・き」の語順でしか両者は結び付かないということである。それゆえ、「申したりしかば」として正解とする。

なお、「き」の活用形で迷った諸君に対して。確かに「き」には未然形「せ」が存在する（ということになっている）が、そもそも「未然形＋ば」の表す《仮定条件》（当然未来の内容を表す）と「き」の表す《過去》が並存し得るわけがない。それゆえ、「この『き』は未然形にするのかな」と考えるだけ野暮というもの。「せば」という形が出てくるのは、「せばくまし」という《反実仮想》の構文のみであると覚えておきたい。

問4 文学史の知識を問う設問。

イ『明月記』は、漢文体による藤原定家の日記。ロ『新古今和歌集』は、言うまでもなく、第八番目の勅撰和歌集。定家はその撰者の一人でもあり、また代表的な新古今歌人でもある。ハ『小倉百人一首』も、定家の選。定家自身の歌「来ぬ人をまつほの浦の夕なぎに焼くや藻塩の身もこがれつつ」も収められている。ニ「三夕の歌」とは、秋の夕暮を詠んだ新古今所収の西行・寂連・定家の三首の和歌をいう。ホ『新撰髓脳』は、藤原公任の歌論書。したがって、ホが正解。

なお藤原定家には、歌集に『拾遺愚草』、歌論書に『近代秀歌』『毎月抄』などがあり、『松浦宮物語』の作者にも擬せられている。また、彼の父は『千載和歌集』の選者である藤原俊成である。

問5 直前に「佐理・行成のあひだ疑ひありて」とあるのがヒントとなる。佐理と行成のうちのどちらであるかに疑問がある、という内容を受けて傍線部の「まだ決定していない」に続くので、当然「佐理と行成のどちらか」ということがまだ決定していないことである。では、何に対して「佐理と行成のどちらか」が決定していないのだろうか。これはさらに直前の「童華院と書ける古き額あり」がヒントになる。つまり、「童華院と書ける古き額」を書いたのが「佐理と行成のどちらか」ということが、まだ決定していないのである。

右の点が押さえられれば、答えは口に決まる。ちなみに、藤原佐理・藤原行成は小野道風とともに「三蹟」と呼ばれた平安時代の能書家である。

問6 やや難。これも自讃の例だと押さえることがまずは大切。問5で見たように、人々は童華院と書いてある古い額を書いたのが佐理なの

か行成なのかについてわからないでいた。と、そこへやってきた兼好が、裏書のあるなしで佐理か行成かを決定することができる指摘し、漸くこの問題は決着を見たのである。

このことを受けて「人皆 **G** に入る」と書かれているのだから、これが自讃になるためには、「人々はみな感心した」とか「人々はみなおもしろがった」といった内容にならなければならない。そこで、「感心する・おもしろがる」という意味になるような「く」に入る」という表現を考えつつ、相応しい漢字一字を本文中から探すことになる。そして、最後の「興あらん」の「興」を抜き出して答えとする。

問7

この段落の内容が押さえられれば容易に解けるのだが、ここでは少し別の視点から解説しておこう。まず押さえおきたいのは、「人あまたともなひて」と始まる前段落から、作者の自讃譚になっている点である（丁寧語「侍り」の出現などに注意）。逆に言えば、もう傍線部Hの段落にイ「堀川大納言殿」・ハ「九条相国伊通公」・ニ「後鳥羽院」は登場しないのである。とすれば、この段階でイ・ハ・ニははずすことができる。

残るは口とホだが、この言葉が「古き女房 〓 優なる女」の作者に向けてのものであること及び「奉る」という謙讓語が用いられていることからすれば、自動的にホに答えは決まってくる。

問8

ポイントは「以X為Y」である。これは漢文における基本構文の一つ。「XをもつてYとなす」と読み、「XをYと思う・XをYにする」などの意味を表す。例えば、「以汝為宰相」なら「あなたを宰相にする」、「以汝為怯」なら「あなたを臆病だと思う」という具合である。なお、前後の文脈から「X」が省略された場合「以為」を「おもへらく」と読む場合があることも知っておきたい。

この設問は右の点さえわかれば容易。「がくは雅をもつて正となす」が正解である。

問9

「ム」という送り仮名があるので、これが「にくむ」と読まれ「嫌う」の意味で用いられていることはすぐにわかるだろう。あとは、「嫌う」の意の「悪」を含む二字の熟語を思い出せばよい。「憎悪・好悪・嫌悪」などの中から一つ選んで答えとする。

なお「悪」の字は、「嫌う」の意に用いるときは「オ」と読み、「悪い」の意に用いるときは「アク」と読む。

問10

「注釈」の最後の一文「利口能弁可以顛倒是非善惡矣」に注目する（というより、ここしか注目するところはない）。ポイントは「能弁」「可以顛倒是非善惡」の二つである。選択肢の中でこの二つを含んでいるのは、ハしかない。したがって、これが正解。イ・口には後者についての指摘がなく、ニ・ホには前者についての言及がない。



会員番号	
------	--

氏名	
----	--